

## 細田 弘著 『そのまた向うの山と空 瞑想的登山から聖山カイラスへ』

腰巻評論に曰く「年と病を重ねつつも山に揺蕩<sup>たゆた</sup>ふ。瞑想的登山の果てに何を感じたのか」。更に腰巻の裏には「あの山の向こうには何があるのだろうか。少年はいつも山の向こうを眺めながら旅立つ日を待っていた。やがて目の前の山からその先の山々を巡り歩き、5年間ほど外国も彷徨う。老いてからは心の最果てを探るべくカイラス巡礼をする。だが、夢見る山はいつも遠い。その先がある。だれもいない山で、だれかに「おーい」と呼びかける」。

田舎の山の中で育った方なら誰にも記憶があると思うが、目の前に連なっている山や丘陵の向こうはどうなっているのか、どのような町があるのか、どのような人たちが住んでいるのかなどと、時々山を越えて聞こえてくる汽車の汽笛に耳を澄ましながら、まだ見ぬそのまた向うの山と空に思いを馳せたものだった。

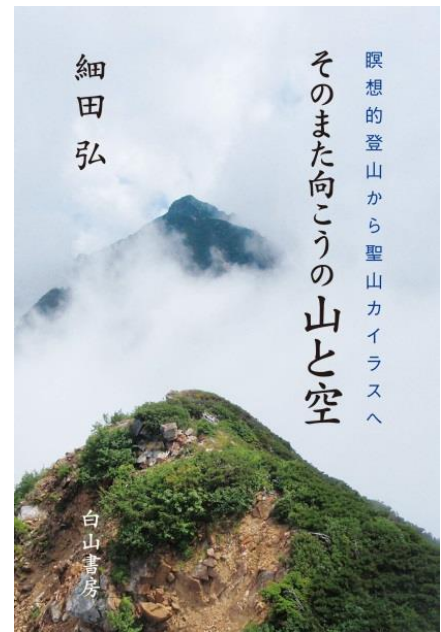
草深い田舎に育った私は、自転車で通学する中学校に入るまでは子供の足で往復できる距離の村境の峠ぐらいまでしか行ったことがなく、その先には何があるのだろうかといつも気になっていた記憶が今でも残っているので、本屋でこの本の腰巻評論を見ただけで中身も確かめずに買ってしまっただが、さて家に帰って本を拡げてみると何かピンと来ない。ホワイトアウトに巻かれたようで周りの情景が見えないのである。

読んでいくと、山行記のようなもの、紀行のようなもの、日記のようなもの、論述のようなもの等々、一見抑揚に乏しい雑多な文章が行列をなして並んでいる。書かれている文章は、よく言えば陽光溢れる清冽なナメを泳ぎ昇って来る岩魚の背鱗の輝きであったり、深いトロの底に隠れて沈潜している鰻のトロロンとした沈思の眼であったり、大滝をシャワークライミングで昇る龍の逆鱗の蘊蓄であったりするのだが、悪く言えば正直何かピンとこないのである。

章建ては、「漂泊の山河抄」、「山と旅の日記」、「心に期する山」の3章から成っている50項ほどの大冊である。著者の山に対する思いは行間に滲んではいるが、著者が下界ではどのような世渡りをしてきたのかが読み取れないのでその人物像が春の夜の朧のようにはっきりと見えないからであろうか。

しかし、途中で放り投げてでも何かしら心に引っ掛かるものがあって、知らない間にまた本を拾い上げてページを繰っている間に、ハッと気づいた。この本には著者の若き頃の山行の記憶と現在の山行の気持ちがない交ぜになっている行間に、古稀を越えてなお“そのまた向うに見える見知らぬ山”に挑もうとする心魂が見えてきたのだ。著者は言う、「老境には老境の登り方がある。体力に応じた山を選ぶのではなく、行きたい山に体力に合った日程で登り、その先のまたその先の山に挑む。それが自分の山との対峙である」と。“その先”とはその向こうに見える山のことでもあるし、同じ山の別なルートや季節や登り方、これからの老境の山行をどうするかなどのことでもあろう。

そのような山行の圧巻は、第3章「心に期する山」に収録されている「遙かなる劔岳北方稜線～大窓から小窓への再挑戦」であろうか。若い頃に辿った厳冬期の赤谷尾根雪洞山行や毛勝三山からブナクラ乗越、劔岳北方稜線への4回のトレースの記憶を織り交ぜながら、古稀を迎えた半世紀振りに再び馬場島から白萩川・仙人谷を遡って大窓から小窓、劔岳北方稜線を単独行で登った折の山行記である。半世紀振りの再挑戦となる一回目はルートに行き詰って中仙人谷の大窓のすぐ手前の断崖絶壁の急斜面でビバーク撤退、二回目の翌年にやっと大窓に出て北方稜線を劔岳まで踏破したのであるが、大窓や小窓



のルートファインディングに苦勞しながらちょっとでも足を踏み外せばその儘あの世行のザレ場ガレ場や草付で行き詰まった様子が心と体の葛藤を交えてリアルに描かれている。

私も若い頃に（といっても20年程前の定年退職した頃のことであるが）北方稜線の単独行を真面目に計画したことがあったので、この山行記と併載されている地図を穴が開くほど眺めて往時の記憶を蘇らせながら読んだのだった。

喜寿を過ぎて体力・気力ともに瘋癲老人になった小生は、夢だけはまだ昔の幻影に取り付かれているがどこに登っても敗退&リタイアの連続で、口さがない連中からいつも馬鹿にされているのである。それで、里山ハイキング程度が関の山になったかと思うのが不思議でもない心境になっているが、これではいけない、時間が掛かっても良いからもう一回自分に出来る遣り方で山の深みに潜りこんで見るべきだと思い直した。

もう岩や沢はどだい無理であるが、例えば南アルプス深南部や北アルプス深部、頸城山系や海川溪谷の道なき山々などは如何であろうか。登山道や山小屋なども無い場所だから、ツェルトとフリーズドライ食料の軽荷で勝手気儘に人目に付かない場所で野宿しながら歩くスタイルにならざるを得ないが、さてさて長時間の藪漕ぎやゲジゲジマークの岩場歩きに耐えられるかどうか、言うは易し行は難し・・・。

小生のことは別にして、齢と病を重ねつつも更なる高みを目指す単独行の著者のご健闘を祈りたい。

余談であるが、著者は白山書房の「山の本」に何回か寄稿された縁でこの本も上梓されたようだ。当会「山なかまシリウス」でも、AkaさんやWadaさんが「山の本」への常連ライターである。お二人にも是非山行紀行集の上梓を期待したい。

白山書房 2020年2月刊 本体1,900円

(酎 2020/07/20 記)